苫小牧の事業所や福祉施設

VR・AR技術 実用的に活用

ゴーグル着けリハビリ／貸店舗内装の3D画像

仮想現実（VR）や拡張現実（AR）の技術を活用した取り組みやサービス提供が、苫小牧市内の事業所や福祉施設で活用されている。VR技術を活用したゴーグル機器を装着したリハビリや、AR技術を利用し、空きテナントに椅子や机を配置した3D画像を見せるサービスなどで、ゲームや娯楽分野だけでなく、実用的な分野でもVR、AR技術が広がっている。（後藤真）

苫小牧東病院（明野新町5）は1月から、VR技術を活用したゴーグル機器を高次脳機能障害のリハビリに導入。装着すると、数字や物体が眼前の3次元空間に浮かび、手で順番に触ることで注意機能を向上させる。視線の動きはデータ化され、注意力の散漫度合いが一目で分かる。

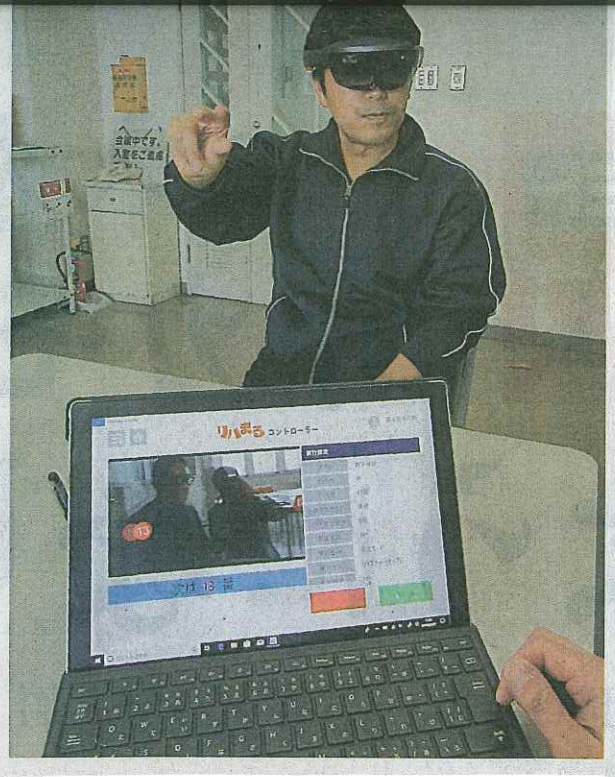
記憶力や注意力の低下がみられる脳血管疾患の患者のリハビリは、鉛筆で紙に線を書いたり、テーブル上の物を見つけたりする方法が多く、「単調で飽きやすい」ことが課題だったが、VR技術の導入で、緩和が期待されそうだ。

同病院は今後、使用事例を増やし、成果を苫小牧リハビリテーション研究会で報告する考えだ。永坂圭司作業療法士は「難易度の設定もできるため患者への適用範囲が広がる。ゲーム感覚で楽しく取り組めるため継続的なリハビリにつながる」と話す。

トートー事務機（住吉町2）は昨年11月の「とまこまいコスプレフェスタ」で、架空のオリジナルキャラクターと写真撮影ができるAR技術を導入したアプリを参加者に紹介。今月下旬からは、空きテナントの入居を検討する事業者に対し、AR技術でフロアの机や椅子の配置・配色イメージを3D映像にし、タブレット端末「iPad（アイパッド）」で見てもらうサービスも始める。

高齢者施設を運営する社会福祉法人緑陽会（松風町2）は、VR技術を取り入れたゴーグル機器を使った認知症体験セミナーを16日に初開催。認知症患者の家族や施設職員ら約40人が参加した。緑陽会は「認知症患者の気持ちを知ることで、介護意識の向上につなげたい」と話す。

VR（仮想現実）、AR（拡張現実） VRはバーチャル・リアリティーの略で、コンピューターで仮想世界をつくり出し、映像や音により現実のような体験を可能とする技術。ARはオーグメンティド・リアリティーの略で現実の映像に文字や画像の情報を入れ、映像の一部を改変する技術。



㊤苫小牧東病院がリハビリテーションに活用しているゴーグル機器。患者の眼前に3次元空間が浮かぶ